鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.14
2013年3月14日発行
鶴見大学文化財学会

写真の話　マクロレンズの勧め

岩　橋　春　樹

学会報に何か書くようにとの依頼である。この3月末をもって退職するので、在任中の想い出などを期待されているのだろうと思う。それも悪くはないけれども、どうも後ろ向きに振り返っての話題というのが面白くなく、教訓調に流れてしまいそうでもある。

そこで、気儘に写真のこと、特に写真レンズを取り上げることとした。文化財にかかわる者にとって、写真撮影は必須の業務の一つだからというのも理由である。御参考までというところ。当方にとっては仕事半分、趣味半分の世界である。

かつて博物館勤務の頃は未だフィルムの時代であった。使っていたのは職場の大型カメラ（ビューカメラと通称する）で、4×5判シートフィルムを装填する。そして、6×7と35mmを補助併用していた。デジタルカメラは未だ最初期の段階であり、コダックが試作的製品を出していた程度であった。それが現在ではデジタル写真全盛という状況である。デジタルカメラの完成度は往時とは比べ物にならぬ水準にある。

現用の機材について紹介すれば、カメラ本体はニコンのD2系とD3系、それにキャノンのEOS Kissシリーズ、計3台の一眼レフを使い分けている。キャノンのKissシリーズは廉価にかかわらず優秀で、レンズさえ選べば決して侮れぬ性能を有している。ハイライト部分での白飛びに強いのは特筆ものである。

レンズはマクロレンズ（ニコンはマイクロレンズと称する）を仕事の場面では主に使用してきた。画角全域にわたる解像度と接写能力を主眼としたレンズである。一般的なレンズが使えないというわけではないが、それらは結局のところ汎用目的のレンズであって、性能特化したマクロレンズの方が一枚も二枚も上手である。例えば、掛軸なら画絹の絹目、工芸品なら器面の微妙な質感が精細に描写される。また、文化財ばかりでなく、動植物を接写する場面でも威力を発揮するレンズでもある。

原則的にズーム機能など持たせぬ単焦点レンズであり、50mm前後の短焦点、100mm前後の中焦点、150mm以上の長焦点、およそ3種類を使い分ける。

以下、注目のマクロレンズを何本か紹介しておくこととする。

○シグマAFマクロ50mmF2.8EX DG

シグマはサードパーティのレンズメーカー（カメラも製造しているが）で、ニコン用、キャノン用等、各社対応のレンズを発売している。この50mmマクロはともかく低廉で、実売3万円以下で入手できる。性能対価格比は抜群である。操作感にやや難点があるが、ニコン用とキャノン用の2本を持っている。

○シグマAFアポマクロ150mmF2.8EX DG HSM

これもシグマの製品で長焦点タイプ。ハイコントラストの鮮明な描写という点で最右翼のレンズであり、人によっては硬調に過ぎると評する。ニコン用を所有。

○キャノンEF100mmF2.8マクロUSM

鮮明だが硬調に振れることなく、知っている範囲で最優秀のレンズである。当然、キャノン専用ということになる。手振れ補正を組み込んだ後継機種も出たが、三脚使用が前提のマクロ撮影に手振れ補正が果たして必要であるのか疑問である。

○ニコンAFズームマイクロニッコールED70～180mmF4.5-5.6D

マクロレンズとしては斯界唯一のズームタイプである。既に製造中止となっており、数年前に最終ロットを出荷するというメーカーアナウンスを知って、急ぎ購入したものである。当初発売時期も古く、現行のマクロレンズ一般のようなコントラストには欠ける印象があるけれども、骨董的稀品として大事にしている。

というわけで、キャノンのEOS Kissシリーズにシグマの50mmマクロなどを付ければ、高性能を安価で手に入れることができる。文化財の撮影を前提にするなら、この組み合わせあたりを基本に考えたい。往々見かけるバカチョン系カメラは日常場面での記録などを趣旨とするものであり、大半の機種が撮影データに自動的に演出加工をほどこしてしまう親切設計になっているので不都合である。但し、緊急の場合は何でも宜しいから、ともかく撮るべしであるが。

文化財学会
春季大会・秋季シンポ関連報告

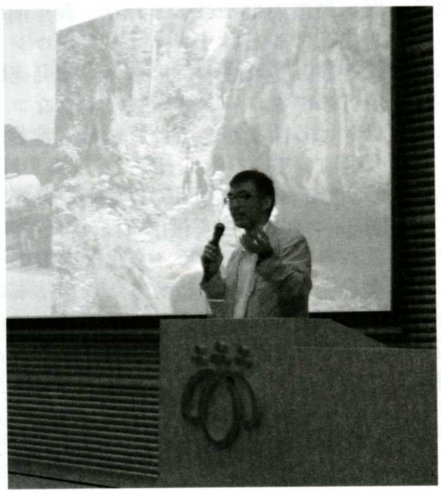
平成24年度鶴見大学文化財学会春季講演会
「世界遺産登録は平泉をどう変えたか」
元・平泉世界遺産推進室　八重樫忠郎先生

報告　2年　千崎　徹也

平成24年度春季講演会は、去る6月2日（土）鶴見大学会館にて「世界遺産登録は平泉をどう変えたか」と題し、元・平泉世界遺産推進室（現・岩手県平泉町総務企画課課長補佐）八重樫忠郎先生にご講演いただいた。

世界遺産とは国際連合に設置された専門機関「UNESCO」により決議された世界遺産条約によって定められた遺産のことを指す。条約の正式名称は「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」であり、その目的は「顕著な普遍的価値」を有する世界遺産を人類全体の遺産として、破壊等の驚異から保護し、保存することである。よって国際的な協力及び援助の体制を確立することも目的としている。

世界遺産の登録には、歴史的背景の善し悪しに関係なく人類が忘れてはいけない歴史の舞台（ヌビア遺跡・アウシュビッツ強制収容所等）が挙げられるが、世界遺産登録が国政のカードとして用いられる場合もある。現に小笠原諸島は平泉ほどの宣伝はしていなかったが、日本を取り巻く諸島における近隣国との領土問題や、経済水域に関係する地域であったため、推薦された。また登録の判断基準が西欧の価値観に偏りがちであり、日本の文化遺産については、寺・神社・城以外はあまり評価されない傾向にある。更に近年では世界遺産が増えすぎてしまったため、登録が難しくなってきている。



平泉は岩手県南部に位置する平安末期に栄えた奥州藤原氏が治めた土地である。京の都に劣らない豪華絢爛な文化が花開いた平泉は、義経を匿った事から頼朝の大軍勢に打ち滅ぼされた。その間僅か100年の栄華であった。平泉の構成遺産は、中尊寺（特別史跡）毛越寺（特別史跡・特別名勝）無量光院跡（特別史跡）観自在王院跡（特別史跡・名勝）の五つである。すべての史跡が宗教に関わりを持ち、どれも浄土の世界を表現しているとされる。

平泉の世界遺産登録は決して簡単なものではなかった。実際のところ平成20年に一度、日本で初めて登録が延期された。しかしそれが功を奏し、平泉の世界遺産登録に対し無関心だった大勢の住民が、この件をきっかけに関心を持つようになり、延期の理由を考え始めるようになった（それまでは行政と、ごく少数の住民のみの活動だった）。その結果、平泉町全体が一体として景観の改善に取り組んだ。ガードレールをパイプ仕様に変更、企業に頼み込んで道脇にある大型看板の撤去や、看板の色彩の変更などを行った。このような行政による「景観条例」の施行が、翌年には住人の手による「中尊寺通りデザインコード」策定を促した。これにより行灯の設置、プランターを木製仕様に変更、住民自らが自宅を和風のものに改修するなど様々な和の雰囲気づくりが施された。そして、平成23年、平泉の世界遺産登録が実現した。

八重樫先生は「世界遺産は町づくり」であると述べ、行政と地域住民が協力しながら共に進んでいく重要性を説き、地域住民、特に子供達が世界遺産の町に生まれた事を誇りに思って欲しいと述べられた。

〈秋季シンポジウム〉
「学芸員の仕事」

報告　2年　千崎　徹也
1年　佐々木歩美

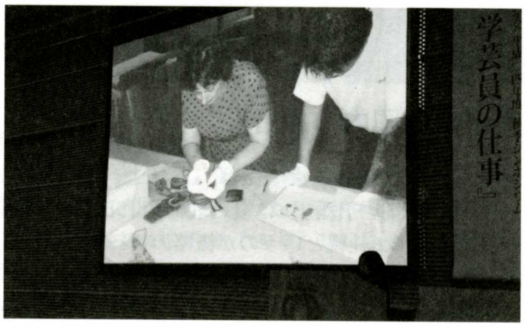
平成24年度秋季シンポジウムは去る11月10日土曜日「学芸員の仕事」と題して以下の内容で開催された。

・川崎市民ミュージアム　高橋典子先生
「川崎市市民ミュージアムにおける学芸業務
～民俗担当の学芸員として～」
・シルク博物館　石鍋由美子先生
「蚕種配布と学校利用
～シルク博物館の活動から～」
・品川区立品川歴史館　冨川武史先生
「地域博物館における歴史展示
～品川区立品川博物館の場合～」

高橋先生

川崎市民ミュージアムは1988年に「地域博物館」として開館。同館は大まかに分けて考古・歴史・民俗から構成される博物館部門と、グラフィック・漫画・写真・映像から構成される美術館部門の両部門を持ち合わせた施設として注目を浴びるが、広い展示室の使い方、収蔵資料・作品の整理作業、建物の構造に起因する空調管理、予算等の様々な問題も抱えている。

学芸員の仕事は、収集・保存・展示・調査・研究・教育普及等を主たる内容とし、同館では本学との共同研究や、年間を通じて学校教育との連携を行っている。また他館との収蔵物の貸し借り、寺社や個人からの物品借用を積極的に行っている。博物館同士の場合、借りる際には保存状態を確認するために出向き、返還する際にも借用品と共に返還先に向かい、最終確認を行う。ロシアの博物館からの借用事例を挙げ、学芸員とは体力勝負でもあると共に、他館の信頼を損なわないために、借用品との同行は重責であると述べられた。



石鍋先生

シルク博物館は1959年にシルクセンター国際貿易観光会館の一事業部門として開館。生き物であり、天然繊維であるシルクを出す「カイコ」を展示飼育している珍しい博物館である。

同館の業務内容は、学芸業務に付随して、シルクに関する真綿や組紐などの普及啓発事業がある。その一環として行われているのが、カイコの有償配布である。主に神奈川県や東京都の小学校・幼稚園を対象にカイコが配布され、飼育説明会・配布日を先生方の参加しやすい日に設定する事で孵化の失敗が少なくなり、飼育方法などの問い合わせが少なくなったと述べられた。理科教材としてカイコを使用している小学校が校外学習の一環で来館するので、各学校に応じての説明並びに体験の時間配分を調整する。今後の課題として「学校現場へ直接PRする事」を掲げ、学校との連携強化を図ると共に、子供たちにカイコをより知ってもらうために伝える工夫をしなければならないと述べられた。

冨川先生

品川区立品川歴史館は、地域博物館として品川地域の歴史的事実を正確に捉え情報を提供する施設であり、「品川区の文化発信の一拠点」を担っている。

品川という地域の特性・特色を生かすために広い視野で地域を捉えた展示や、個別の地域の一部のスポットに焦点を当てた展示が重要である事を述べられた。また、資料展示の他にも館自体が展示空間であり、その例として館内のフロアタイルの一部に遺跡の位置を示したり、昭和初期の茶室や庭園を保存、活用している事を述べられた。

同館にとって講演・講座を開き区民との交流を持つ事は大事であり、学芸員として生きていくには授業や実習で学ぶ専門分野だけではなく、コミュニケーション能力や臨機応変に来館者に対応する能力も必要であると述べられた。

講演後に本学講師の星野玲子が司会を務めた質疑応答では、各発表者個人に対する質問形式で行われた。

実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

岩橋　春樹

今年の実習Ⅳ（国内）は夏の北海道。日高・十勝～道東～旭川・札幌というのが概略のコースで、8月20日から26日、6泊7日の行程である。予想外の猛暑には閉口した。

見学先は、源義経北行伝説の遺跡、蝦夷三官寺の一つであった国泰寺、世界自然遺産・知床、生態展示で人気の旭川市旭山動物園等である。引率は岩橋と伊藤先生。総勢16名、今回は女子2名のみという硬派ツアーとなった。

○義経神社

日高平取（びらとり）に鎮座し、祭神は源義経である。幕吏にして探検家であった近藤重蔵が寛政十年（1798）頃に創建したと伝える。沙流（さる）川流域、平取周辺が義経北行伝説の中心地であり、わけても当社がその根幹となる。北海道巡検では是非とも訪れたい所である。

義経は平泉を脱出、蝦夷地に逃れ、やがて大陸に渡ってジンギスカンになったというのが北行伝説であるが、アイヌの人々を大いに教化した一方、彼らから文字を奪い去ったという物語もあり、そこでは善悪両面を備えた人物像に設定されている。

○国泰寺

蝦夷三官寺の一つとして徳川幕府により道東厚岸（あっけし）に創建された。正式には景雲山国泰禅寺、臨済宗である。寺であるとともに、蝦夷地における行政支所としても機能し、受け持ち範囲は道東から択捉（えとろふ）島にまで及んだ。

住職は鎌倉五山から出すのが例とされ、建長寺派と円覚寺派との輪番制。極寒の地ゆえに住職候補者は往々にして逃げ腰であったらしい。鎌倉、あるいは神奈川にゆかりある寺として承知しておきたい。現在は妙心寺派である。

○世界自然遺産・知床

従来、保護と観光のすみ分けが課題であった。現在は厳しく立ち入り制限されている。ウッドデッキ（高架木道）利用。ネイチャーガイドの引率等々。やむを得ない処置であろう。

当初計画では知床五湖の内、一湖周辺を巡る予定にしていたところ、訪問前日に熊が出没したため、要所は立ち入り禁止となり、ネイチャーガイドと安全地帯の散策にとどまったのは残念であった。とはいえ、エゾシカ数頭に遭遇して至近距離から観察することができた。

○旭山動物園

動物達のありのままの姿を見せる理想の動物園として世評が高い。確かに多数の入園者で賑わい、大駐車場も満杯であった。

しかし、子供向けの遊園地という印象が強く、博物館施設としてのレベルは、いかがなものかというのが率直な評価である。ミュージアムグッズも観光土産風のものが大半で、魅力に乏しい。

学生諸君の意見も概ね同様で、上野動物園やズーラシアの方が好ましいという声が強かった。傾斜面に施設立地し、坂の登り下りを強いられる点にも疑問が呈せられた。

○カラオケ大会

最後の夜は恒例のカラオケ大会を挙行する。今回はＩ君のキャラクター最大限発揮、有り体に申せば単独盛り上がりにつきる。本人は楽しかったんだろうが、周囲は呆れ果てるばかりであった。まあ、元気なことは善き哉というところであろうか。

知床にて

平成24年度実習Ⅳ（海外）巡研報告

星野　玲子・下室　覚道

平成24年度、実習Ⅳ（海外）の巡検は東欧諸国を訪ね、城や教会などの歴史的建造物を中心とした文化財を実見した。引率は星野先生と下室。総勢18名。男性10名。女性8名。

日程は以下の通りである。

9月5日（水）
成田空港→パリ経由でチェコ・プラハ

9月6日（木）
プラハ市内観光（旧市街、エステート劇場、カレル橋、プラハ城）

9月7日（金）
ドイツ・ドレスデン市内観光（ツヴィンガー宮殿、フラウエン教会、アルテ・マイスター絵画館）、続いてマイセン観光（陶磁器博物館と工房見学）

9月8日（土）
チェコ・ブルノ市内観光

9月9日（日）
オーストリア・ウィーン市内観光（シェーンブルン宮殿、ヨハンシュトラウス像、国立オペラ座、市庁舎）

9月10日（月）
ハンガリー・ドナウベント観光（エステルゴム大聖堂、センテンドレ散策）
ハンガリー・ブタペスト市内観光（マーチャーシュ教会、漁夫の砦、ゲレルトの丘、くさり橋）

9月11日（火）
ブタペスト終日自由行動

9月12日（水）
ブタペスト→パリ経由で成田空港

ゴシック、ルネサンス、バロックなど時代を象徴する様々な様式によって造られた貴重な建物を多く見学し、あらためて、政治や宗教の権力によって、今日に続く文化財が造られたことを感じた。また、町並みそのものが文化財であり、14世紀カレル4世のもとプラハは黄金時代を迎えたが、プラハ歴史地区などは世界遺産にも登録されている。

建物以外に関しては、ドレスデンのアルテ・マイスター絵画館ではラファエロ、ルーベンス、レンブラント、フェルメールなどの絵画を間近に拝見することができた。また、エステート劇場はモーツァルトが「ドン・ジョバンニ」を初演し、超絶技巧で有名なヴァイオリニストのパガニーニも演奏したとの説明に、思いを古の大音楽家に馳せた。

数多の文化財を見学したが、特に印象深かったのがエステルゴム大聖堂である。丘にそびえ立つその偉容・崇高さは素晴らしかった。今でも思い出す。

ところで、残念なことに、9月10日の夕方、小生は一行より一日早く会議のため帰国しなければならなかった。聞くところによれば10日の夜はドナウ川をクルージングし、ブタペストの夜景を満喫したという。ああ残念、残念。

以上のように、実習Ⅳでは東欧の歴史、美術、文化財などから貴重な体験を得ることができた。大きなトラブルもなく無事に巡見が終了したことを報告する。

今回は加藤寛教授が健康を崩されたため、急遽、下室が担当し星野先生とともに引率させていただいた。加藤教授の速やかなご回復を祈念して擱筆する。

於　ブタペスト

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では「歩くと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象とした巡検を中心に活動しています。

平成24年度は、12月9日（日）に行った第49回『東叡山寛永寺と上野の森美術館巡検』のみの活動となりました。

巡検を行うにあたり、12月7日（金）の例会の時に、寛永寺の歴史に関する解説と現在見ることのできる文化財等の解説を行いました。寛永寺は、徳川15代将軍のうち6名もが眠る徳川家の菩提寺であり、寛永2年（1625）年の創建から将軍の庇護の下、国内最大級の寺院として偉容を誇りましたが、戊辰戦争や関東大震災、東京大空襲により甚大な被害をうけ、創建当初の姿を今に残す建物は非常に少ないですが、「時の鐘」など随所に当時の意匠を感じることができました。

上野の森美術館は部員からの声が多かった特別展「ツタンカーメン展」を鑑賞に行きました。ツタンカーメンの内蔵が保管されていた容器や、ツタンカーメンの祖母の棺など黄金の装飾が特徴的な展示物を観ることができました。しかし、ツタンカーメン黄金のマスクはカイロ美術館から出すことはできないそうで、残念ながら観ることはできませんでした。

部員の都合がなかなかつかず、予定していたよりも少ない活動数となりました。来年度は、部員の興味・関心を重視するとともに、活発な活動をしていきたいと思います。

古典芸能研究部会

私たち古典芸能研究部会は、古典芸能など日本の伝統文化に直に触れる体験、鑑賞を通して、それらを身近に感じ、学ぶことを目的としています。主な活動内容は、年に2回夏の会・冬の会での「装束体験」や「雅楽体験」などです。

「装束体験」では、伝統装束の着付けを学びます。講師として東京成徳大学の青柳隆志先生をお招きして、總持寺の紫雲臺にて行います。今年の夏の会では、「韓国王朝装束」をテーマにして着付けを行いました。国王・王妃・尚官・武官・文官など宮廷に仕える人々の装束から一般韓服まで幅広い装束を着付けました。

着付けは意外と簡単で、すぐに覚えられました。韓国装束は色鮮やかで、特に女性の装束は青（緑）、紅、黄、白、黒の五行思想を基にした色調でした。国王の装束は真っ赤な生地に金糸の豪華な刺繍で目にも鮮やかなものでした。王妃の鬘も被ったのですが、とても重たく、うまく頭が動かせない状態でした。アクセサリーなどの付属品の数々も細かな細工がしてあり、とてもきれいなものでした。

今年度は夏の会・冬の会以外にも秋の会と称して11月に「第60回　野村狂言座」を観に行きました。公演内容は「柿山伏」「箕被」素囃子「神楽」「木実争」でした。狂言は、実際に舞台で観ると、テレビ画面とは違い、迫力があり、圧倒されました。初心者向けの公演でもあり、解説パンフレットが配られて、初めてでも楽しんで観ることができました。

研究部会の活動で、歴史はただ机に向かって勉強するものだけではないと、身を以て知ることができました。今後は春と秋に能や狂言、歌舞伎鑑賞を、夏と冬に装束体験や雅楽体験を予定しています。興味を持たれた方はお気軽にご連絡ください。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、他の部会と比べて、比較的新しい部会です。宗教関係をメインに博物館の見学や神社、お寺の巡検なども行っています。宗教に関係がなくても部員の要望があれば、それにそった活動をおこなっていきます。巡検に訪れる前には、事前学習をして最低限の知識を得てから巡検を行います。

今年の活動は6月に国立科学博物館「インカ帝国展」、9月に大船観音寺での「アジアフェスティバル・キャンドルナイト」、11月に東京国立博物館「出雲特別展」見学の3回のみの活動となってしまいました。

神奈川県JR大船駅近くにある大船観音寺での「アジアフェスティバルとキャンドルナイト」は、私たちが毎年お手伝いをさせていただいているイベントで、「アジアフェスティバル」は毎年9月頃にアジアの人々の文化的交流を目的にそれぞれの文化にちなんだダンスや歌、楽器の演奏などを観音様の下のステージ

で披露する行事です。また「キャンドルナイト」では、観音寺にある原爆投下時の広島の残り火をキャンドルに灯して世界の平和を祈ります。

私たちの仕事は、ステージの設営や物品の販売補助などの裏方のお手伝いですが、普段の生活ではあまり馴染みのなかったアジアの民謡や楽器などにふれることができ、仕事を通して様々な人との交流をもてたことは、今後の活動の視野を広げていく大変良い機会になりました。

今年度の活動は3回と少ないものになってしまいました。来年度は1ヶ月に1度の活動をめざし、部員たちの意見を取り入れた巡検の計画をしたいと思います。今まで訪れたことがない場所はもちろん、一度訪れた場所であっても、前回とはまた違った新たな発見をするための活動にも取り組んでいきます。

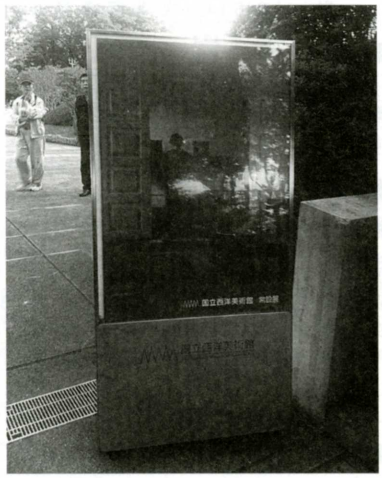
美術工芸研究部会

美術工芸研究部会（鶴鳴会）の2012年度の活動を報告します。今年度の第1回目は、6月に横浜のそごう美術館で開かれた特別展「京都　細見美術館展 Part2琳派・若冲と雅の世界」を見学しました。ここでは琳派や伊藤若冲の作品を中心とした仏教美術や工芸品を鑑賞し、琳派や伊藤若冲の技法に注目して部員同士で意見交換を行いました。

第2回目は、上野の国立西洋美術館の常設展と、東京藝術大学美術館で開かれた「東京藝術大学創立125周年記念事業 漆芸 軌跡と未来」を見学しました。国立西洋美術館では、中世絵画を描いた画家がどのような思いで描いたのか、を考えながら鑑賞しました。東京藝術大学では、明治時代から現代までの藝術大学卒業生製作の、伝統的なものから現代アート風まで、さまざまな漆工品を鑑賞し、部員でどのような印象を持ったのか、どの作品が美しいと感じたかなどの意見を交換しました。また展示札に書かれている材料が作品のどの部分に使われているか、という点にも注目しました。

第3回目は、11月に根津美術館で開かれた特別展「ZESHIN柴田是真の漆工・漆絵・絵画」を見学しました。海外で収集されたコレクションが紹介されている是真ですが、今回は国内の優れた作品が約30年ぶりに展示された大変貴重な特別展であり、柴田是真の独特な技法に注目をして鑑賞しました。

今年度、美術工芸研究部会（鶴鳴会）は、わずか3回の活動しかを行うことが出来ませんでした。来年度は今年よりも多くの活動を行い、また他の部会とも連携していきたいと考えています。また、来年度は美術館での鑑賞だけではなく、体験活動として陶芸制作なども行う予定です。

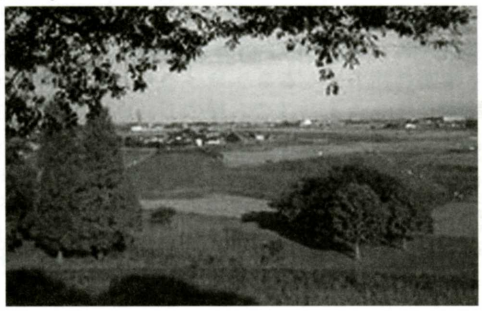


歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、活動理念である「関東全域に目を向けた活動を基本とし、古代から中世を中心に歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し活動を行う」ことを意識しています。この活動理念のもと、関東だけでなく部員の興味に合わせて地域や時代を限定する事なく、活動を行っています。特に、巡検に力を入れた活動を行っています。

今年度は、6月に宗教研究部会と合同で、国立科学博物館の企画展「インカ帝国展」を見学しました。インカ帝国の歴史などについての知識を深める事ができました。

来年度は、今年度よりもさらに活発な活動を行っていきたいと思います。また、他の研究部会と合同での活動も考えています。巡検の予定などは、6号館の地下の考古実習室前にあるホワイトボードに掲載しますので、興味がありましたらお気軽にご参加ください。



鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
　1　研究等の発表
　2　講演会の開催
　3　会誌・会報等の編集刊行
　4　研究部会活動
　5　HP上での広報活動
　6　親睦その他の事業
6．本会に次の役員を置く
　1　会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
　2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7．本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8．本会の事務所は下記におく。
　〒230-8501
　神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
　鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

付　平成11年10月16日から発足する。
付2　平成16年4月1日　一部改正
付3　平成23年4月1日　一部改正

平成25年度の年間行事予定

春季講演会
　日　時　6月1日（土）　午後3時から
　会　場　鶴見大学会館メインホール（予定）
　テーマ　「世界遺産登録に向けて・富岡製糸場」（仮）
　講　師　未定（群馬県世界遺産推進課）

秋季シンポジウム
　日　時　11月2日（土）　午後1時から
　会　場　鶴見大学会館メインホール（予定）
　テーマ　「文化財学科の15年とこれから」(仮)

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学　文化財学会
TEL：045 (580) 8139
URL：http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html
E-mail：bunkazai@tsurumi-u.ac.jp

編集後記

学会活動に加わって1年が経ちました。「まだ先は長い」と思っていたが瞬く間に過ぎてしまった。初めて経験することが多く、当初は右往左往の連続だったが、次第に「今、何をすべきか」がわかるようになってきました。来年は2年目である。率先して行動ができるよう努めたい。
（田村記）

巻頭緒言を今年度を最後に退職される岩橋先生にお願いした。担当することが出来て、大変光栄に思うと共に、さらなる文化財学科の発展を会員の皆様にお伝え出来るような文化財学会報を刊行していきたいと思います。
（小野記）

文化財学会報Vol.14を刊行するにあたり、ご助力を賜りました方々へこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。今号より、新たに連絡先に電話番号を追加いたしました。ご興味・ご質問などをお持ちの方は左記までお問い合わせください。この会報を通して少しでも文化財学会を知っていただければと思っております。
（伊藤記）